

目崎城にまつわる話

下原と津山市領家との境にそびえる目崎城（眼崎城）は、町内でも比較

的規模が大きい山城跡です。この城の特徴は、斜面に平行して畝状に無数の溝を掘り、城を攻めてくる兵の左右の動きを封じる「堅堀」という防御施設が美作国内の山城では最多の約五〇本確認されていることです。さらに、なだらかな尾根上には兵士が駐屯する郭や武者走り、そして敵の侵入を防ぐ「堀切」を隙間なく備え、念入りに作られた城である

ことがわかります。しかし、これほどの城でありながら目崎城の城主や歴史について詳しい記録は残っていません。したがって、後の時代に書かれた伝承等の記録を採っていくしかないのですが、様々な説があります。

『作陽誌』（元禄四年（一六九二）刊）には、昔、目裂金剛王という身長三メートル以上、手が四本、足が八本、鉄のような体をした怪物が目崎城に住み、国内の婦女をさらって

暴悪の限りを尽くし、国司の軍隊も撃退するほどの強さを持つていましたが、

高野神社の神の加護により現れた朱い鳥に目をえぐられ、ついに倒されるといいます。また一説として、目



堅堀跡（赤線が堅堀の輪郭）

崎城は大崎美濃前司頼末という人物が築き、代々大崎氏が城主を務めていましたが、文明年中（一四六九—一四八六）に毛利日向守前司秋家という人物が城主の大崎国吉を襲って殺害し、代わって毛利氏が代々城主を務めました。天正九年（一五八二）秋、毛利盛光が江見左馬助と戦い敗北し、その後城主無しとされています。

『美作餐鏡』（享保二年（一七二七）刊）では、城主は浦山左馬助行信とされています。

戦の記録としては『作陽誌』の中に、毛利左近亮という人物が円宗寺山（津山市里公文北）と平福（同里公文）に城を構え目崎城主と争い敗死する、と書かれています。『久米郡誌』（大正二年（一九一三）刊）では、圓住寺山城主の毛利元尊が目崎城主大崎氏と戦って敗死したという事になっています。

また、同書には目崎城の山麓の中

北下に「陣簾」という平坦な土地があり、（こ）は天文十三年（一五四四）五月、山陰の大名人子国久の家臣・立原某が大軍を率いてこの地に陣を構え、目崎城を攻略したことからの地名が付いたと伝えられ、この時、目崎城の城兵が城を出て惣論議（協議）した場所が陣簾の東南にあり、現在は「宗呂木」という地名になっていると書かれています。

これらは、後世に書かれたもので、それぞれの書物で食い違いがあり、さらに根拠となる史料に乏しいため、何が事実であったかは判断できませんが、目崎城の縄張りの配置は実戦に備えた緊張感があり、おそらくは敵対勢力と交戦状態にあったことが想像できます。当時の記録は残っていませんが、城の位置や規模等から安土桃山時代には、安芸の大名・毛利輝元的美作進出において拠点となった岩屋城（津山市中北上）から葛下城（鏡野町山城）、神楽尾城（津山市総社周辺）らの諸城を結ぶ要衝として何らかの役割を果たした可能性も考えられます。

参考：『美作古城史』『作陽誌』『久米郡誌』『美作国

生涯学習課 目下

電話（0868）54-7733



目崎城跡



目崎城跡頂上付近